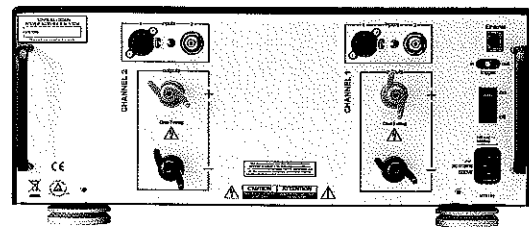




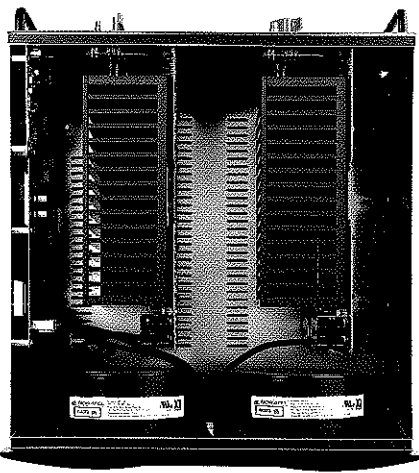
マークレビンソン No532H

パワーアンプ
¥1,155,000 / TEST REPORT by 石田善之

●定格出力:300W+300W(8Ω) ●入力端子:2系統(RCA、XLR) ●スピーカー出力端子:1系統 ●入力感度/インピーダンス:2.25V/30kΩ (RC Aアンバランス)・60kΩ (XLRバランス) ●消費電力:600W ●寸法・重量:451W×194H×504Dmm・33.6kg



■背面:経路の最短化を図り、上段に入力部、下段の出力部を配置。左右対称配置は、左右独立のモノラル構成を示している。



■内部:前面パネル側に左右2基の大型トロイダルトランスを置く。各チャンネルは入力部から増幅、出力部、電源部の全回路はヒートシンクも取り付けられた1枚基板に配置。

左右で独立した大型トロイダルトランスを持ち、1枚の基板上に信号回路と電源回路が一体化、各々に大型ヒートシンクも備える。

入力部、電源増幅段、電力増幅段、電源整流回路を共通基板として、シグナルパスを最短化しているのが特徴。電力増幅段に対してバスバーなどを使うことなく大電力を直接供給でき、電源インピーダンスも小さく抑えられるという合理的かつ実質的な設計で、高音質につながっている。

高品位ハイパワーを実現する合理的設計を採用。伸びやかで躍動感にあふれた堂々としたサウンド

音質的に重要視される電源用のコンデンサーには、小容量の高速型キャパシターをパラレルで多数使用している。

非常に密度が高く、伝統のマークレビンソンの名への期待に違わない伸びやかで躍動感にあふれたサウンドだ。オーケストラは重心が低く安定感も十分。トゥッティ部分を見事な解像力で聴かせられる。表情も豊かで堂々たる風格が漂う。

ボーカルの人肌の温度感、ジャズの浮き浮きとしたスイング感なども、超一流と言いたい描写である。

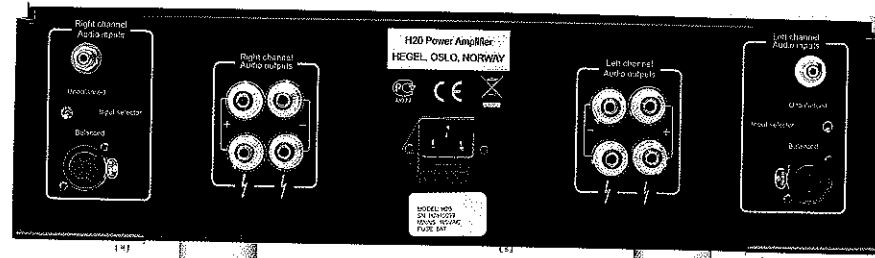
マークレビンソンのベーシックアンプ

同社のアナログパワーアンプのハイエンドモデルにはフルバランスオペレーションのNo532がある。本機はその技術的な流れを汲んだ430シリーズに替わる新世代のスタンダード・パワーアンプだ。本機はデュアルモノラル構成だが、同じ筐体を採用したモノラル・パワーアンプとしてNo531Hもある。チャンネル当たり300W(8Ω)、入力にRCAとXLRを備えるなど回路的にもスペック的にも同一である。



ヘーゲル H20

パワーアンプ ¥735,000
TEST REPORT by 細谷信二



■背面:入力端子がRCAとXLRの2系統、スピーカー出力も2系統を備えバイワイヤリング接続なども行いやすく機能的。

●出力:200W+200W(8Ω) ●入力端子:2系統(RCA、XLR) ●スピーカー出力端子:2系統 ●消費電力:60W(アイドル時) ●寸法・重量:430W×140H×370Dmm・25kg

プリアンプは、アキユフェーズC2410を使った。このプリアンプの魅力は、音の鮮度感の高さにある。ヘーゲルH20は、そうした特質をストレートにスピーカーまで送り出してくれたという印象だ。けつして派手さのない明るさ、リズムの明快なうねりを再現。何よりも楽音のつながりが濃密な音をもつ。聴いているうちに聴き手を音楽の内面に引き込む力強さがある。たとえば、私がジャズのヘルゲ・リエンなどを試聴で

濃密な音で聴き手を音楽の内面に引き込む。エネルギー感にあふれたスピーカーを鳴らし切る。

聴く場合、どうしても楽音そのものの質感表現ばかりに神経を注いでしまう。しかし、H20ではピアノストが何を語りかけているのか、ドラムスとベースの対話に対してピアノは、次に何を投げかけるのか?といった、たいへん音楽的な聴き方となる。

楽劇「バルジファル」でも、弦と木管の響きの美しさに圧倒され、音楽にグイグイと引き込むエネルギーが十分に感じられた。スピーカーを鳴らし切る、という表現がぴったりのアンプだと思う。

音楽現場とも密接に関わるヘーゲルのアンプ技術の特徴

ノルウェーのオセロに本拠地をもつ同社はジャズで有名なECMレベールのリファレンス再生機器として採用され、同時にオセロの録音スタジオ(レインボー・スタジオ)と考えられる)とも技術的に緊密な関係をもつ。このことからわかるように、音楽の現場で要求される厳密な性能と信頼性とを論理的に追求して製品化を図っている。放送や通信機器さらには高周波機器までもに対応する技術集団によって最新技術が開発・導入されている。